

僕の父は小説家だった

吉川 猛

学校から帰って玄関にランドセルを放り出すと、狭いキッチンの奥に向かつて声をかけた。

「お父さん、調子はどう？」

それがいつものぼくの「ただいま」だった。

食卓用の細長いテーブルの前で、父はこちらに背を向け座っている。ノートパソコンをしきりに叩く音がしている。

「ああ、なかなかいい感じだ」

うん、と小さくうなずくとぼくはフスマを開け、ランドセルを持ってとなりの部屋へ――アパートの間取りは風呂トイレのほかそこしかないから、食べる以外のことはすべて行う部屋に入ってテレビを点けた。

ほんとはもっと話しかけたかったが、小説がはかどっている時はえんりよしていた。テレビ台の上のリモコンを取りスイッチをONにすると、音の盛りを八から四に下げた。

けれど夕方のその時間帯にはきまつてドアをノックする音がした。

「どうぞ、開いてます」

座ったまま言う父の声がフスマごしにきこえた。ドアの開く音がつづき、男の人の声がした。

「こんにちは、お兄さん、あっ、インターネット使用中ですか、ちようどよかった、今ならお安く――」

「使ったことない」

低くてよく通る父の声がひびくと、フスマの向こうは静かになった。カタカタキーを叩く音しかしない。

もう帰ったのかなと思いかけた頃、ためらいがちに、

「……お仕事ですか、はー難しそうですね、失礼ですがどういった業種で？」

パソコンの脇に積まれた辞書や辞典をみて言ってるのだろう。

「何に見える？」

しばらく間が空いた。

「そうだなあ……もしかして先生？ 高校か、ひょっとしたら大学の――」

「小説家だ」

また沈黙がおとずれた。さっきより重い、一秒一秒がいやな音を立てて擦れ合うような、長くごちない沈黙。ぼくは男の人の次の言葉を今か今かと待った。

「わあすごい、作家さんでしたか！ だったらなおさら Wi-Fi は必

需品ですよ。執筆のさい、いろんな最新の情報を取り込むのに――」

「そんな物いらない、大切な情報はすべて俺の中にあるのだから。」

それに俺は作家じゃない、小説家だ。さっき言ったろ」

発言の途中で父の声の向きが変わった。たぶん途中から面と向かって言ったのだろう。

男の人が小声で何かブツブツつぶやくのがきこえた。いきなりドアの乱暴に閉まる音が鳴った。ドアの向こうで、笑い声の混じった

どなり声がした。

訪問者はそのほか浄水器や健康食品の訪問販売、聖書研究会など日によってまちまちで時間もばらばらだが、毎月二十五日にはきまって四時半にドアが鳴った。

その時に限って、父は自分から立ってドアを開けに行った。

黙って入ってくるのはやせた小柄なお婆さんだった。いつも頭にスカーフを巻いてサングラスを掛け、着ている服はスベスベ光ってカラフルだった。

ぼくはフスマを細く開け、「こんにちは」頭を下げた。きちんとそうするよう父に言われていたから。

お婆さん――アパートの大家さんは軽くなずくと、玄関と床との段差のへりに腰を下ろした。

部屋の隅へ行った父はタンスの引き出しを開け、薄緑色の封筒を取り出した。大家さんの前にしやがみ、「お願いします」かすれた声でいうと封筒を渡した。

大家さんは封筒を開け、お札の端っただけ出して一万円札が四枚あるのを確かめた。本当は千円札があと三枚必要なのに、まけてもらっているのだ。それは父のためじゃない。

「この前の特売日、スーパ―で奥さんお見かけしましたよ。気の毒に、朝早くからじゃがいもや玉ねぎの山抱えて、夜勤明けで少しでも横になっていたいだろうに」

父は黙って自分のひぎを見つめている。

「こんなこと言える立場じゃないんだけど、もう少しお考えになってあげたら？　ちよつとは奥さんの負担を減らせるように」

父はあいかわらずきちんとそろえた太ももに目を落としたままだ。

「……料理は、してます」

床に置いた家賃入りの封筒がパチッと鳴った。

「収入の面ですよ！　奥さんのためを思ってお安くして差し上げてるけど……失礼だけどあなたの月々の原稿料とこの家賃、どちらがお高くて？」

父の顔に驚きの色が走った。ぼくも驚いた。原稿料、少しでももらえてると思っていたのか……。

「小説家は……」

消えていく父の声、その続きはきこえなくてもぼくにはわかった。

「小説家は職業じゃなく生き方」父の口癖だ。

「とにかく奥さんをもっと大切に。このままだと逃げられちゃうわよ」

ひじから下げた巾着袋に封筒を入れると、大家さんは出ていった。ゆっくりパソコンの前にもどった父はまたキーを打ちはじめた。

が、すぐに止まった。それを何度かくり返した。

立ってキッチンの中をウロウロしはじめると、何気なく冷蔵庫を開けた。野菜室から玉ねぎとじゃがいもを手にとった。

「今晚カレーでいいか？」

夜九時になるとぼくらは押入れから布団を出し、並べて敷いた。布団に入ると二人とも天井を向いたまま、ポツポツ少しだけ話した。そのうち父は枕の下から分厚い本を引っ張り出し、しおりをはさんだページを開いた。仰向けのまま両手で重そうな本を支え静かな、けれどはっきりとした声で読みはじめた。寝る前に世界の名作をぼくに読み聞かせるのが毎夜のきまりだった。

天井を見上げたまま、ぼくは聞いていた。たぶんカタカナで書いてあるのだろう、外国らしい名前や地名が沢山出てきた。だが、どこで、何をしているのかさっぱりわからない。それでも我慢して聞いているとドーナツ型の蛍光灯は二重になり三重になり、ゆっくり旋回しはじめた。パタッと本を閉じる音がした。

「今日はここまで。寝る時間だ」

父は立って灯りを消した。

目を閉じたぼくの横でかすかな音がしていた。ポツとまぶたの裏が少しだけ明るくなった。薄目を開けて横を見ると、父の枕元で小さな電気スタンドが光っていた。その下にノートが開いていた。

布団から出た父の顔はうつ伏せに枕の上にあごをのせていた。そのうち布団からにゅっと右手が伸び、ノートの白いページの上に降りた。指先のペンが動いて何かを書きつけた。それからじっと立ち止まり、またちよっと動いてをくり返した。その動きを見ているうち、いつのまにかぼくは眠ってしまった。

シャワーの音で目が覚めた。布団の中で首だけ起こし目をこすりながら枕元の目覚まし時計の蛍光色に光る針をのぞいた。六時三十分から四十分の間。

昨日の夜、ぼくの布団の横に並んでいた父の青い布団はなくなっていた。今その場所には同じ花柄だけどピンク色の布団が敷いてある。だれかが中に入って寝た跡もなく、隅々まできちんとそろって

平らだった。これはあれに似ている。

ずっと前、まだ保育園に通っていた頃、三人で旅行に行った時泊まった民宿、食堂で晩ご飯を食べたあと部屋にもどると敷いてあった布団、あれみたいだ。

毎朝遅くても六時に父は起き、自分が寝ていた布団を片づける。そして母の布団を敷き、六時半には部屋を出て行く。母が帰ってくる前に。少しは寝てるのか一睡もしていないのか、ぼくにはわからない。たまに真夜中おしっこでトイレに起きると、父はまだ布団の中でノートをにらむか、キッチンでパソコンを叩いていた。

シャワーの音が止んだ。パッキンがゆるんでいてポタポタ水滴の垂れる音がしている。浴室のドアをそっと開ける音、それからドライヤーのいちばん弱い風の音。

それが止むと冷蔵庫の開く音、食器どうしのぶつかる音、流しに水の当たる音がとぎれとぎれにきこえる。

母はついさっきまで、朝六時まで駅前のサウナで働いてたから、きっとお腹が空いて寝る前に軽い夜食、時間的には朝食だけど、をとっているか、それとも、夕方四時頃から働いて休憩時間に食べた弁当（これは昨日の朝父が作って冷蔵庫に入れておいたものだ）の弁当箱を洗ってるか、そのどちらかだ。

しばらく何もきこえなくなる。遠くのほうから救急車が走ってくるような音がうなり出し、すぐにピタッと止んだ。パソコンのスイッチをONにしたのだ。

母がパソコンで何を見ているのか、すぐにわかった。今朝出がけに父が打った手紙を読んでいるのだ。

そのうちカタツ、カタツ、とぎれとぎれにキーが鳴り出した。たぶん人さし指一本で打っているのだ、父あての手紙を。手紙というか、つまりそれは毎日する父と母の交換日記のようなものだった。

七時になるとぼくはそっと布団から抜け出し、なるべく音を立てないように布団を畳んだ。母はもう眠っている。さっきパソコンキーの音を聞いてたら、ついウトウト二度寝してしまい、母がフスマを開けて入ってきたのに気がつかなかった。

押し入れを開ける時、ガタツと鳴らしてしまった。母の顔を見た。閉じている目のまわりがヒクヒクふるえていた。でもすぐに引いていって、うつすら開いていく口から寝息がもれた。両腕の間に布団をはさむと、母に背を向け押し入れにしまう。

「おはよう」

背中にも母の声がして、ぼくはワツと驚く――とここまでが毎朝のしきたりだった。けれど本当のところ、母が起きてたことにびつくりしたのは、わ

ざとしての遊びなんだと母はわかってるのだろうか？　そもそも母がほんとはずっと起きてたのに寝たフリをしていたのか、それさえよくわからない。

なぜなら小学校に入ってから、もう三年になるけれど、母と顔を合わせるのは朝のこの短い時間と、仕事が休みの日だけからだ。仕事の休みは火曜日と木曜日で、夜はいつしよにご飯を食べるけど、そのあと母はドラマを観ながらすぐに居眠りしてしまう。それだから母が何を思いどんな行動をとる人なのか、よくわかっていなかった。

「学校はどう？　面白いことあった？　あったら聞かせてちょうだい」

目をつぶったまま、母は寝言みたいにいう。

そうだなあとぼくは思い出してる顔をして母の枕元に座る。ほんとは昨日の夜のうち考えておいてスラスラ暗誦できる話をやっと今思い出したみたいに話す。友だちの誰々とああしてこうして……ほんとはその中の登場人物にぼくはいず、教室で見聞きしただけのエピソードだけ。

はじめのうち、さも興味なさげに語っていたぼくの口調は知らず知らず熱を帯び、

「それでね、それで……」

母はうつすら笑いながら、今度はほんとに眠っていた。

父と母がなぜ、顔を合わせないようにしてるのか、ぼくは知らない。仕事が休みの日には母が夕食の当番だ。携帯でメニューを調べ作ってくれるおかずは父のよりずっとおいしい。だから火曜日と木曜日の晩は楽しみだ。

その食卓に父はいない。次の日の夕方、母が仕事に出かけるまで帰ってこない。どこで一泊してるんだろう？　それに、なぜ？

一度だけ母にきいてみたことがある。その時も母はやっぱり布団から顔だけ出して、目を閉じうつすら笑いながら、

「いつしよにいるとすぐにいがみ合ってしまう……一度占いの館で見てもらったの、そしたら言われたわ、同じ屋根の下では住めない運命って」

それだけ？　さらに聞き込もうとしたけれど、もう寝息に変わっていた。

父にもきいたことがあった。夕食の時だ。

「お前にはまだわからないだろうが……一人しか入れない場所があっただね……二人で入るとお互い窮屈でどこか照れくさく、そのうち二人ともイライラしてケンカになってしま……ちようどそう、学校にもあるだろ、立ってするほうじゃない、座ってする用のトイ

レ」

父は箸を止めると、換気扇の横の真つ暗な小窓を見上げた。

「狭い場所なんだよ、愛というのは……個室トイレみたいに」

父の言うことはいつもさっぱりわからない。トイレなら、たとえば父がユニットバスに浸かってる時、ぼくが平気で扉を開けおしっこしに入っても父は怒らないのに。

こんなわけでも一日のうちぼくが母と過ごすのはほんのわずかで、父との時間がほとんどだった。学校のない日曜日の昼間など、母はずっと家にいるけど、フスマを閉めて台所にいたら、いないんじゃないかと思うほど物音一つ立てずに眠っている。だからぼくは学校のある日と同じ時間に起き、母を起こさないように台所で静かにパンを食べ、登校の時刻に出ていくと、お昼にもどって父の作ったご飯を静かに食べ、また出ていった。

この前の日曜日、いつもより早く目が覚めた。ふと部屋の片隅をみると、タンスの前の暗がりには父が座っていた。外出用のポロシャツを着て、床の上に置いたポストンバッグに何か詰め込んでいた。

ぼくが半身を起こすと、父はビクツとぼくのほうを見た。

「日曜日だぞ、ゆっくり寝とけよ」

カバンのチャックを閉め立ち上がった。

「いつしよに行つていい？」

父はちよつとうつむいた。高く張り出した額の下でアメリカ人みたいに引っ込んだ目、いつも蔭になってよく見えない目のまわりがさらに濃い蔭になった。

「いいけど……遊びには行けないよ」

ぼくは布団から飛び起きると、急いで着がえた。

まず向かったのは最寄りの駅だった。都会へ向かう電車と田舎へ向かう電車のうち、田舎のほうをえらんだ父は階段を上がつてホームに立った。ぼくも後からついていった。ホームの端のベンチの上で少年ジャンプが一冊、風にめくれていた。近づいた父は手に取った。

「読むか？」

ぼくが首を横にふると、父はジャンプをもとにもどした。

十分位して来た電車に乗った。端っここの短い席に座ると、すぐに父はひざにのせたポストンバッグからペンと小さなメモ帳を取り出した。車両はガラガラだったけど、斜め前の長い席のこちらの端に、女の人が一人座っていた。ネズミ色の髪がべったり頭の形に貼りついていていた。カーテンを巻き付けたみたいなたい筒状の服を着て、色もうちのカーテンみたいな緑がかつたグレーだった。コンビニの袋を両手に握りしめ、時々開けては中にのぞくビンのフタを取り、何

か飲んでゐる。さつきからずっと怒ったような口調でつぶやいてゐる。

窓の外に向いてゐた父の目線がゆるゆる横へ流れていつて、女の人の上で止まった。父の目が一瞬だけ光り、すぐにまたいつものぼんやりした蔭の中に沈んだ。ちよつとしてから、メモ帳を開いて何か書きこみはじめた。ぼくがのぞこうとすると、

「小説家は休みなし、常に何かを取り返もうとしている。小説家に限ったことじゃないけれど」

その教えにならってぼくもひざの上の遠足用リュックから本を取り出して開いた。『読んだのしいことば辞典』今年の誕生日、父に買ってもらったものだ。

何駅か過ぎると女の人は降り、乗ってくる人もなかった。車両にはぼくたち二人だけになった。

「先に朝ご飯にするか」

父の言葉を合図に、ぼくたちはそれぞれのバッグからおにぎりを出して食べはじめた。ぼくの分は、お昼に食べる予定だった冷凍ご飯を父が急いでチンして握ったものだから、塩がききすぎて海苔も小さすぎたが、まだほんのり温かかった。

窓の外はだんだん建物がまばらに、木が多くなってきた。食べ終えたと父はバッグから、これも出がけにあわて用意した水筒を出した。フタを取ってそれに半分お茶を注ぎ、ぼくに渡した。ぼくは飲み干すと、父に返した。父は自分の足元に向けパッパッとフタを振って滴を飛ばすと、自分は飲まずにフタを閉めバッグにもどした。

父はメモ帳をしまうと、いつも部屋で使ってる大きなノートを取り出した。水筒やいっしょに入ってる折り畳み傘のせいとか、丸く反ってるのを反対側に曲げてまっすぐのばすと、ページを開いた。

ぼくも負けじと、ことば辞典を開いた。

でもお腹がいっぱいのせいで、それに背中のほうで強くなりはじめた日射しがぼかぼか気持ちよくなりだしたせいで、つい顔を上げとろんとした目で向かいの窓をながめてしまふ。一本、二本、とびとびに立っていた木が林になつたり森になつたり、その向こうには低い山並みがつづいてゐる。

そういえば先月学校の遠足でハイキングに行ったなあ。町並みが見渡せるてっぺんの丘で弁当を食べたなあ。あれっ、いつのまにかまわりにクラスメイトたちの声がして、みんな笑つたりしゃべつたりしながら食べてゐる。ぼくも自分の弁当に箸をのばす。おかずが四品も入って、どれもきれいな色をしたカラフルな弁当。でもおかしいな、父の作つた弁当は梅干しをのせたご飯と玉子焼きしかなく、丘の隅っこのほうで弁当箱のフタを斜めに中身を隠しながら食べて

たはずなのに。

「終点ですよ」

ハッと目を開けると、前に駅員さんが立っていた。

父は腕を組み、うつむいたままじっとしていた。あいかわらず高い額の蔭になって目を開いてるのか閉じてるのかわからない。ノートをひざの上に開いたまま、ペンは座席のぼくと父の間に落ちていた。

駅員さんが父の肩に手を伸ばしかけた時、

「わかってる」

父の声がした。

「だったら降りて下さいよ。ていうか、あんたしよっちゅうでしょ、ここは寝るとこじゃないんだよ。あんまりひどいと、ここまでの運賃請求することになるからね」

駅員さんは勢いよく腕を振り大股で行ってしまった。父はまっすぐ背筋を伸ばして座り直し、手の平でゆっくり顔をこすった。ぼくのほうをチラッと見た。唇の端がちよつとだけ笑った。

「寝てたんじゃなく、夢の中に小説のイメージを描いてたんだ。あいつ、わかってないな」

折り返した電車はぼくたちが乗った家の近くの駅に着いた。父は降りずにそのまま乗りつづけた。窓の景色は建物がどんどん増えていき、高くてきれいなビルがぎっしり並び出した。

「何時になった？」

きかれたのでぼくはポケットから腕時計を出した。買ってもらってからしばらくは遊びに行く時、必ず腕に付けて出かけていた。ある日バツタリ出会ったクラスメートに、

「あっ、安物の時計してる、この前百貨で見たぞ」

いわれてからポケットに入れることにしている。

「八時二十三分」

ぼくが答えると、父は考え込むように首をひねった。

「久しぶりに今日はあっちへ行くか」

そのうち窓の外は真っ暗になって、ネズミ色の壁しか見えなくなつた。

次の次の駅に電車が止まると、父は立ち上がった。ぼくもリュックを背負い、席を立った。

改札を抜けると、父は地下道を右に折れた。途中にある「出口1」や「出口2」の階段を上ることなく、左に折れまた右に折れた。カベの上のプレートが示す矢印のとおりに進み、その上に書かれた「区役所」を目ざしてるのだなとわかった。

そのうち短い通路は行き止まりになり、「地下鉄連絡口」と書いて

た自動ドアにぶつかつた。ボタンを押して中に入ると、すぐ横のエレベーターに乗った。4のボタンを父は押した。扉の上の「各階ご案内」を読むと、四階は図書館だった。

「いいか、ここにある本しか読めないからな。自分の本は出しちゃだめだぞ」

光っていた4の字が消え扉が開くと、ユニットバスの色をした床につづいていた。その向こうの丸いカウンターの中に女の人が座っていた。なつかし映像で見るようなくっきりした髪型で、腕にペットボトルに付けるみたいな黒いカバーをはめていた。

「おはようございます」

ひとり言みたいに小さくきこえて、うつむいて座るその人が言ったのか、それともその向こうで本の束を抱えウロウロしてる女の人の声なのか、わからなかった。

ぐんぐん前に進んでいった父はクルッと向きを変え奥へ、四角い机がいくつも集まり、そのまわりに人がいっぱい座ってる横を通り過ぎた。ズラッと並ぶ背の高い本棚の前まで来ると足をゆるめた。目を細め、うつすらほえみながら一列一列ながめわたした。「海外の文学」コーナーで曲がった。

分厚くて同じ濃い緑色の背中をした本がぎっしり何十冊もつまつた棚の前に立った。一番上の段の左から右へ、一段下がって右から左へ、移っていた父の目線がピタッと止まった。一冊抜き取り、表紙をなでた。金色の文字で「世界文学の森 その16 ドストエフスキ」『悪霊』

適当に開いたページに目を落とし、小さくうなずきながら見入っている。

「ぼくは何を読めばいい？」

顔を上げた父はそうだなあとまた緑色の本の列に目を移した。

「ちよつと早いけど……勉強だな」

一冊抜くと、待ちかまえたぼくの両手の上にのせた。冬の掛け布団みたいに重かった。表紙には「ポオ名作集」

「あの、失礼ですが……息子さん何年生？」

ふりむくと、向かいの棚の前にぼくらと背中合わせに、銀色のメガネをかけたおばさんが立っていた。

「子供向けにやさしく直したのがありますよ、児童コーナーに。『モルグ街の殺人事件』ってタイトルで」

優しそうに笑いながら父を見て言った。

おばさんは入口のほうを指さしていた。ぼくは本棚の間から顔だけ出して、そつちを見た。

カウンターの向こうに、黄色いマットを敷いたまわりを白い本棚が丸く囲んでいた。天井からキラキラ光る折り紙の星や花や動物た

ちがぶらさがっていた。

「誠に恐れ入りますが：：上っ面の物語だけ追って何になります？子ども扱いは禁物、文学においても。まあこの子の判断に任せますが」

おぼさんの頬がサツと赤くなり、何か言いかけたがクツと飲み込んで口を閉じた。短くおじぎすると、あわてて向こうへ行ってしまった。

父とぼくは緑色の本を持って座席に向かった。

机のまわりのイスはほとんどが埋まっていて、父とぼくは離れて座った。ぼくの斜め前、ほぼ机の対角線上に父は座った。本を机に置くと、また適当にパラッと開いて読みはじめた。

ぼくも本の表紙を開いた。白黒のさし絵があり写真があつて、目次をめくると一作目のはじまりだった。

「黒猫

私がこれから書くこうとしているきわめて奇怪な、またきわめて素朴な物語については、自分はそれを信じてもらえらると思わないし、そう願ひもしない。自分の感覚でさえ：：」

：：最初から、なんでやんでるの？ その先に書いてあるはずと続きを読んだ。ページの終わりまで行ってもわからない。とにかく真剣になやんでることだけは伝わってきた。

顔を上げ、父のほうを見た。同じように本から顔を上げてる父と目が合った。と思ったのは勘違いで、実際にはぼくの顔を通り抜け、その向こうを見ていた。ふりむいて同じ方向を見た。カウンターの女の人はあいかわらず下を向きバーコードリーダーを片手に、ピッピッと本に当てて鳴らしていた。

机の下に垂れていた父の右手がゆっくり上がった。ノートを握っていた。ペンをはさんだページを開くと、すばやく本の下に差し込んだ。

今までどおり本のページに目を落としたまま、時々チラッと目を上げては本の背を浮かせ、ノートに何か書きこんだ。

何度もくり返してるうち、その動きはだんだん間隔を縮め、ペンを持つ手は囲いから出たハムスターみたいに、もう本を押しつけ堂々とノートの上を走り出した。

「あつ、いけませんよ！ 勉強はやめて下さい！」

うしろで大きな声がした。まわりのお年寄りたちがいっせいに父のほうを見た。カウンターの女の人が競歩みたいに全力でぐんぐん近づいてきた。父の背後で立ち止まった。

「しまつて」

あごでノートを指し、細い横目で父をにらんだ。

父は女の人に人さし指を向け、何か言いかけたが言わなかった。

大きく息を吐くと、ノートを閉じバッグにしまった。

「俺が文学史に残る文脈をだな、ひらめこうとしてる時にだな」

降りていくエレベーターの中で、両手を使った大げさなジェスチャーとともに扉に向かって演説している。

あのあと騒ぎがひとしきり収まると、父はもう一度ノートを本の下にしのばせた。最初はカウンターを盗み見ながら恐る恐る、いつしか我を忘れペン先は踊るように。

結果、出ていくこととなった。

地下一階で降り駅まで来ると、父は切符売り場の上の路線図を見上げた。物思いにふけるようにゆっくり顎ひげをなで回した。

「俺はもう一軒当たってみるけど、お前どうする？」

少し考えたあと、ぼくは今昔館に行くと言った。あそこなら無料でなぞなぞや昔の動物を探したりできるし、それがいつもの日曜日の過ごし方だった。

めずらしく父のほうから外に誘うこともあった。月に一回位、行き先は郵便局ですぐ近くだけだ。

学校から帰り、部屋の前まで来たぼくはドアノブを回す手を止めた。いつもはひっそりした部屋の中から、歌がきこえる。女の人の甲高い声で、テレビのなつかしのヒットメドレーで聞いたことのある曲。よくきくと、男の人の低い声がいつしよにボソボソ歌ってる。

ドアを開けた。男の人：：父の声が止んだ。

閉じたパソコンを置いた机の前で、腕を組みこちらに背を向けている父の背中がビクツと揺れた。パソコンの横のCDラジカセに手をのばすと、歌そのものが止んだ。

「すぐ出かけるけど」

ラジカセを食器棚の横にしまいながら言った。

ぼくはクツをはいたまま玄関先にランドセルを置いた。クツ箱の上のエコバッグ―クリアファイルと封筒が一枚ずつしか入ってない薄っぺらなバッグを手にとった。

駅前のコンビニへ寄ったぼくらはまっすぐ雑誌コーナー横のコピー機へと向かった。父はポケットから板チョコーマス分みたいな黒い小さな板を取り出した。コピー機に差し込むとパネルにタッチし、百円玉を何枚も入れた。コピー機は静かな深い寝息を立てはじめ、うつすら字が透けて見える白い紙を吐き出した。何枚も何枚もはてしなく続いた。

「印刷が終了しました」

コピー機がやっとしゃべった。父は取り出した紙の束を一枚一枚数え終わると、隅をトントンそろえぼくに渡した。ぼくはとつと

出しておいたクリアファイルにそれをはさみ、エコバッグにもどした。

駅前通りに沿って歩くと、すぐ先のドトールに入った。父がレジに並び、ぼくは二人掛けの席に座った。注文はいつも同じだから父はきかないし、ぼくも言わなかった。

すぐに父がこっちに来た。テーブルにトレイを置くと向かいに座った。ぼくはエコバッグから分厚くなったクリアファイルを出し、テーブルの横から父に渡した。受け取った父はもう片手でトレイからアイスコーヒーを持ち上げ、腕をのばしてテーブルの隅に避難させた。ぼくはオレンジジュースとミルクレープを自分の前に置くと、空いたトレイを壁に立てかけた。

広々としたテーブルの真ん中に、父はファイルから出した紙の束をのせた。ポケットから缶の筆箱を出すと紙の横に置いた。テーブルに広げた両腕で紙を囲むと、グツと前屈みになって読みはじめた。ぼくはわざとゆっくりミルクレープを食べ、オレンジジュースを飲んだ。しばらくして父が一口も飲まないアイスコーヒーをこっちにすべらせた。それもとくに飲み終えた頃、やっと顔を上げた父はテーブルの上で紙の束をきれいにそろえた。

筆箱から出したクリップで留め、パラパラめくった。紙の上がちこち白く盛り上がっていた。まるでアパートの居間の壁みたい。ここに來てからずっと、父が文字の上に白いテープを貼ってはその上に書き直していた作業の跡だ。

バッグから封筒を出して渡すと、父は紙の束をその中に入れた。糊のテープをはがすとフタを折ってていねいに閉じた。何十日ぶりに見る笑顔でぼくに渡した。

「よし、急いで郵便局だ」

郵便局でする仕事はぼく一人の役割だった。番号札を引き、番号が呼ばれると窓口へ向かう。封筒を渡す前、『〇〇新人文文学賞係』宛名を指さし、

「今日の消印、押してください」

最初の頃は、父に言われたとおり、そう念を押していた。

今では黙って封筒を渡すだけで、どの局員さんもポンと日付のハシコを押すと、にっこりしてぼくに見せてくれた。

この役目は二ヶ月か三ヶ月に一回だが、それ以外にも毎月一回、郵便局へ行く用事があった。その時の封筒の宛名は『澤良木冬月通信添削講座』

でもこれは『新人賞係』の時ほど楽しみじゃなかった。コンビニで紙を取り出した父はコピー機の上でそれを封筒に入れ、まっすぐ郵便局へと向かうので、途中でドトールに寄ることもなかったからだ。

けれど、最後に郵便局へ行ったのは春休みの最中で、今はもうすぐ夏休みだ。最近の父は、パソコンに向かっている時も、ほとんど真っ白な画面をじっとにらんでるか、やっとキーを叩き出しても、すぐに右上の同じキーを何度も押してまた白にもどしてしまふ。

夜の九時半になって部屋の灯りを消し、枕元でしおれた朝顔みたいな電気スタンドを点けノートを広げている時もそうだ。目を開けたまま眠ってるみたい、夢でうなされるようにウーンとうなりながら、ペンを持ったままじっとしてることがほとんどだった。

ある晩、夕食を終え二人で片づけをしていると、めったに鳴らない父の携帯が鳴った。流し台の前に立つ父は出ようとせず、お皿を洗い続けた。ぼくもお皿を拭き続けた。

電話はいつまでも鳴り止まなかった。ハァーとため息をついた父は水道を止めエプロンで手を拭くと、ノロノロ部屋に入り床の上の携帯を拾った。二つ折りのそれを開いた瞬間、サーッと父の頬が白くなった。携帯を耳にぶつけるみたい、に押し当てた。

「もしもし……冬月先生、ですか……」

「……わかります……いえ、そういうわけじゃ」

「……何というか、行き詰まったというか、枯渇したというか、想像力は底をつき……」

まっすぐ背筋をのばして電話を握る父はだんだん腰を落とし、そのまま床の上に正座した。大家さんが来た時みたい、に。

長い間隔をおいて、たまに「はい……はい……はい……」とうなずくだけの時が過ぎた。

「えっ、私小説ですか!!」

父の声がはね上がった。

またとぎれとぎれの、「はい」が続いたあと、
「では早速取りかかってまいります。懇切丁寧なご指導、痛み入ります」

父はまた書きはじめた。今までよりもっとわき目もふらず、小説のこと以外何もかも忘れたような打ち込み方で。

ぼくとしては書いてる時は話しかけないよう心がける、これは今までどおりだ。けれどどうしても聞いてほしい用事がある時は困った。たとえば国語の宿題でわからない問題が出てきた時。たずねても父は、聞こえてないのか黙っているか、聞こえた時も、

「答えは……ない、つまり無数にある」

「問いを見つけないければ、答えじゃなく問いを」

寝言みたいに上ずった口調で言うのだった。
そのせいもあって、今までなら何書いてるのかな？ と父の後ろ

に座ってパソコンをのぞき込むのは、気が散るからとえんりよしていた。けれど今はもう父の背中にびったり貼りつくようにのぞき込んで、父は気にするそぶりを見せない。だからぼくも画面の上の文字をじっと見た。

『小松菜は足が早いから今日じゅうに使ってね　下にレシピ書いておきます』

あれっ？　これはもしかして。

父は画面を下にずらした。レシピが何行も続いたあと、一行空いて、

『夕食は小松菜と玉子の中華炒め　あの子も美味しいと喜んで食べていた』

これはあれだ、父と母の毎日の手紙、交換日記だ。

そのうち文字の群れは青いマーカーを引いたみたいにズラズラ塗りつぶされながら上へともどっていった。いきなり画面が切り替わった。今度は画数の多い文字が混み入った機械の内部みたいにぎつしり並んでいた。父の小説の文章だ。パチツと父がマウスを押す音がした。突然下のほうに文字の塊が現れた。

『小松菜は足が早いから――』

『コピーしたの？』

思わず声に出してしまった。

「ああ、私小説だからな」

パソコンをにらんだまま、父は言った。

また次の日の日記が青く塗りつぶされ、コピーされた。

久しぶりに郵便局に来た。番号を呼ばれ窓口まで行くと、見覚えのある女の局員さんは小さく手を振ってくれた。ぼくはたぶん過去最高に分厚い封筒を渡した。

「重いね：：中身は本？」

ぼくは振り向き、後ろに立っていた父にきいた。父はぼくの耳元でささやいた。

「まだ本じゃないけど、なるかもしれない」

女の人に伝えた。

そういえば父はちよつとやせたみたいだ。顔は細くなり、目は前よりもっと引っ込んで、開いてるのか閉じてるのかますます見分けがつかない。歩き方もどこかフラフラして危なげだ。でも昨日までとちがうのは今日の前を歩いていく舗道がよく弾むゴムか何かでできてるみたいで、足取りはどこか軽やかだった。その勢いのまま帰り道のコンビニに寄った。

「好きなもの二つ選べよ」

ぼくにお菓子を買ってくれた。

それから何日かたったある日のこと。学校から帰ると、父はめずらしくパソコンを閉じたまま座っていた。

「郵便受けに手紙入ってなかった？」

なかったよというのと、父は黙ってうなずいた。まるで無理矢理させられるみたいで、そおとパソコンを開き、人さし指だけでポツポツ打ちはじめた。そんな日が何日かつづいた。

次の週の月曜日の夕方。ドアを開けると、やっぱりパソコンは閉じていた。でもその上に分厚い紙の束がのっていた。猫背になった父は顔を近づけ、大事そうに両手で囲っていた。

ぼくにもすぐにわかった、先週郵便局に出しに行ったあれだ。でもあの時とちがうのは、黒い文字の上に赤い線が何本も引いてあったり、何行にもまたがる赤い大きな×印、そのまわりに赤い小さな文字がびっしり群がっていた。

その夜、晩ご飯を食べ後片付けを終えると、父はきれいに拭いた机の真ん中にあの紙の束をのせ、右手に三色ペン、左手に携帯を持って番号を押した。

「もしもし：：はい、届きました。精細なるご批評、胸に刻みつつ拝読いたしました。つきましてはいくつかご質問が：：」

先生の声が携帯と父の耳の間からもれている。ぼくの耳には沸き出したお湯の音にしかきこえない。

「省略の美学ですか：：はあ：：しかし俺、失礼、私としてはですね、細部のリアリティが必要かと」

「絵に例えるなら、ですか：：写真主義でしょうか、リアリズム、写真にそっくりな」

お湯の音が、沸騰したみたいに大きくなった。

「えっ、抽象画？：：抽象芸術、ですか：：私小説とは」

父は紙の束に目を落とすと、一枚目から「はい、はい」うなずきながら青色の文字で空いてるスペースに書きこみはじめた。

ぼくは部屋に入ってテレビを点けた。音の目盛りを2まで下げると携帯からもれる先生の声に似てきた。すぐに飽きてテレビの穴にイヤホンを差し音量を上げた。

次の日から父はまた『私小説』にかかりきりになった。ぼくは父の向かいのイスを机から引っぱり出し、父の座るイスの斜め後ろに置くと、そこに座って見守るのが習慣になった。『私小説』の中に、ぼくの名前が出てくるかな、との期待もあったが、まだ出てきたことはなかった。

パソコン画面の真ん中に二つだけある四角いマーク、のうち『事務連絡』と書いたほうを父が押す。現れたのは父と母の交換日記だ。マウスの車輪をグルグル回すと、どんどん上の方に、ずっと前に書

いた日記にもどっていく。

とある一日で父の手が止まると、青い帯が伸びていつて文を囲む。パッと全部が消え、またもとのマーク二つしかない画面にもどる。今度はもう一つの『タイトル未定 執筆中』マークを父は押す。ズラッと漢字の多い難しそうな文が出てきて、カチッとマウスが鳴ると、さっきの日記一日分がその下に現れた。

その下に父はまた自分で一文字ずつ打ちはじめた。ふたたび画面の多い漢字の列が画面を重苦しく埋めていった。たまにひらがなが出てきたなと思ったら、「がゆえに」とか「しかるに」とか「をもつてして」、「ふだんは聞いたことのない言い回しばかり。間にはさまった母の書いた文はひらがなとカタカナばかりで、言葉づかいもしやべったのをそのまま書き写したみたいなのに。画面全体を見渡してみると、まるで配色の合わない二つの絵の具で塗り分けたみたいだ。でもそれはぼくがわかってないだけで、小説とはこういうものなのかもしれない。

画面をにらみながら、父はウーンとうなったり、ため息をついたり、文字を消したりまたもとにもどしたりした。いつのまにか父の左手は携帯に伸び、「もしもし、冬月先生ですか」掛けることがあった。

「省略ですよね……その奥にある抽象……しかしあくまで事実を曲げることなく」

電話はほんのたまに先生から――たいいてい夕飯を食べてる時に鳴ることがあった。あわてて出た父は縮めた肩と耳の間に携帯をはさむと、箸と茶碗をペンとノートに持ちかえた。

火曜日が来た。学校から帰るとテーブルの前のイス、ふだんは父の座るイスに母が座っていた。火曜日と木曜日はいつものことだ。背中を丸め携帯を見ていた。

「晩ご飯は何？」

いつものようにレシピを検索してるのだろうと、ぼくは母の背中に声をかけた。

母はパタッと携帯をテーブルの上に伏せた。

「えっ？……ああ、何にする？」

母は立って冷蔵庫を開け、中をのぞいた。

夕食はオムライスだった。母にはめずらしく凝っていない定番のメニューだ。父もよく作ってくれるけど、もちろん父のより見た目がきれいで美味しかった。

片づけを終えると、ぼくはテレビの前に座って画面に食い入り、母はすぐ横にある座イスの上で携帯を見ていた。これもいつものことだ。いつもとちがうのは、携帯から韓国ドラマの俳優の声がきこ

えてこないことだ。それにいつもならこの時刻になると両目がトロ
ンとしてきて、いつのまにか座ったまま寝入ってしまう。なのに今
夜はパッチリ開いた目でけんめいにひらがなのボタンを押しつづけ
ている。

ぼくもさっきからリモコンのボタンをひんばんに押していた。面
白い番組がなかったからだ。しかたなく3チャンネルを観ることに
した。韓国ドラマを再放送していた。ぼくは興味がなかったが、男
のかもしれないと思って。ストーリーは全然わからなかったが、男
の人と女の人が顔どうし引つつくくらいまじまじと見つめ合い、真
剣に何か話し合っていた。

突然画面が切り変わった。草原を群れで移動するアルパカが映っ
ていた。振り向くと、母が真横にいた。手にリモコンを握っていた。
ぼくは驚いて母の顔を見ようとしたが、うつむいたままぼくの膝
にリモコンをのせると、早足でキッチンへ行ってしまった。

それから何日かたったある朝のこと、目覚まし時計の音で目が覚
めた。しまった、寝坊！……じゃないけれど、いつもは母のシャワ
ーの音でそれより早く起きているのに。横の布団を見た。あれっ、
母が寝ていない、というか布団そのものがなかった。

台所で物音がしていた。何かを包丁で切ってる音。フスマを開け
た。流し台の前に父が立ってキャベツを刻んでいた。

「おはよう。ハムエッグ、もう作っていいか？」

いや、それよりも。

「お母さんは？」

父は横顔だけふりむき、あごを上げて机のほうを指した。ぼくは
いつも父が座るイスに座り、マウスを握って開いてるパソコン画
面を見た。近頃ではぼくが父の小説に興味を示してるのをみて、父
がいない時も勝手にパソコンで見たいとゆるされていた。

でも今見るのは『執筆中』じゃないな。『事務連絡』ボタンを押し
た。

昨日の日付で母の書いた文が現れた。

『明朝のシフトにドタキャンあり、わたしが入ることに 仮眠室で
寝るので明日は帰れません 買い物はしてあります レシピも二日
分のせておきます』

「さあ出来たぞ」

父はパソコンを閉じると端にどけ、ハムエッグとキャベツ、ト
ーストののった皿を置いた。ぼくは自分のイスに移った。

「さてと、これで今日一日、家でゆっくり書けるな。まああいつは
ちよつと大変だけど」

ニコニコ目尻と頬にしわを寄せ、父が言った。父が笑うことはめ

ったにないが、こんなにも「笑ってるぞ」とアピールする笑い、小さい子向けの絵本かアニメでしか見たことのない笑い方をするのは初めてだった。

父の『私小説』へと向かう勢いは今日も全然衰えていない。『事務連絡』の、コピーする日付はどんどん古くなっていて、とうとう一番上まで来てしまった。

父は押入れを開け、下の段にぎっしり積まれた文庫本を一山ずつ出していった。一番奥からヒモで縛ったノートの束を見つけ出すと、胸に抱えた。机に持っていくようにとぼくに渡し、本の山を押入れにもどした。

机の前に座った父はヒモをほどき、一番上の一冊を手を取った。『二人に今日あったこと』太いマジックで書いてある表紙をめくって読みはじめた。読んでいるうちにだんだん座り方が浅くなって、そのうち脚を組みはじめた。イスの背もたれは背中の重みでギシギシ折れそうな音を立てた。額にはしわが寄り、でも口の端は少し上がった。困ってるような笑ってるような顔だった。

ぼくは近づき、父の肩越しに読もうとした。けれどぎっしり埋まった文字は小さすぎて、しかも字体のちがう二種類の文字はどちらもきれいじゃないから、読みとれなかった。

「この頃は俺もまだ工場にいて会社の寮に住み……憶えてるか？」

お前は……ああ、まだ生まれてなかった」

結局この日はパソコンを叩いてはすぐにやめ、古いノートをパラパラめくるのくり返しだった。

父と郵便局へ郵便を出しに行く、毎月の決まり事がまた復活した。やっとスランプを抜け出したのか！ けれど他にも理由があった。

母は火曜日の休みがなくなり、しかもその日は会社に泊まりで家に帰ってこれなくなった。だから火曜日は電車や図書館でなく、家で

のびのび書けるせいもあるのだろう。

ちがうのは前は分厚い束にまるごと一つ大きなクリップが留まっていたのに、今はいくつかの薄い束に小さなクリップが一つ一つ留まっていることだ。宛先も先生ばかりで『○○新人賞』はもう何か月も送っていない。だからドツールに寄ることもなくなつて残念。

先生への電話は水曜日だけになった。たぶんえんりよしてるのだろう。晩ご飯の片づけが終わるとだいたい七時十五分、父は右手をマウスに置き二十八分になるとじっと時計をにらみ出す。三十分になつたとたん携帯のボタンを押すのだった。

先生のほうから掛かってくることは、今でもたまにある。片づけをしている最中が多く、父が濡れた手を拭いてる間にぼくが電話に出

ることもあった。

ある日父がシンクをゴシゴシこすっていると、電話が鳴った。ちょうどテーブルを拭いていたぼくはその上にあった携帯に飛びついた。

「もしもし、先生ですか？」

弾んだ声でぼくは言った。何度か声でやりとりしてるし、この前は父がトイレに入っていて、出てくるまで少し話した仲だ。

返事がない。電話の調子が悪いのかなと振ってみたあと、もう一度「もしも――」

「……もしもし、息子さん？ お父さんいらつしやる？」

先生よりずっと若い声で、父と同じかもっと若々しい感じた。

「ああ失礼、私カツダといいます。勝利の勝に田んぼの田、お母さんの会社の――」

エプロンで手を拭き近づいた父はぼくが説明する間もなく携帯を取った。

「もしもし、お電話ありがとうございます……アッ」

電話が父の手からこぼれ、スポツと落ちた。とっさに曲げたひざと両手でなんとか受け止め、耳に当て直した。何も言わず、ただ聞いていた。そのうちぼくに背を向けキッチン、隅へ行くと、右手で口と携帯の下の方をすつぽり包んだ。

「……ああ、わかってる……だからわかってる……責任？ 何の？……それなら感じて……何だって!!」

ひと声張り上げた父はふりむいてぼくの顔をチラッと見た。携帯を耳に当てたまま玄関まで行き、サンダルを履いて出ていった。ドアの外で時々なるみたいになくなる父の声がきこえていた。

母は火曜日だけでなく、木曜日も帰ってこない週が多くなった。母が夕食を作り、それをいっしょに食べることもほぼなくなった。時には火水木と三日帰らないこともあった。帰ってきてても、いつまでもシャワーの音がしていたり、キッチンにいてなかなか布団に入つてこない日がだんだんふつうになった。それでぼくも、やつと母がフスマを開けても、寝たフリをしていた。七時になり、布団を押入れにしまう時になっても、母はもう寝てしまったのか、「おはよう」と言うこともなくなった。

それだから火・木は一日じゅう父は部屋にいて、さあこれですます小説に打ち込めるぞ、と思っていたら、そうはならなかった。またパソコンやノートをにらんだままうなったり、頭を掻いたりする時間が長くなった。先生に電話を送る原稿の束も薄くなった。

するとやはり、先生に電話を掛ける日は水曜日だけじゃなくなつた。

「昔のことになると、どうも記憶があいまいで……えっ、美化ですって？　してません、断じてそんな……」

「今の今ですか、書くべきは……今のこと、は書きたくない……実はその……いえ何でもありません」

「書きたくないこと、こそを書くのですね、わかりました、やってみます」

夕方の五時を過ぎ、そろそろ夕飯を作ろうと父が冷蔵庫を開ける。空っぽに近い。最近ではよくあることだ。

「うつかりしてた……買いに行くけど、いつしよに来るか？」

近所のスーパーに二人で行っても、買うものはいつもだいたい同じだった。夕飯のメニューもカレーやシチューや肉野菜炒めが多くなった。

ある日の夕方、父はまたウンウン言いながらパソコンと格闘していた。しまいにパタツとフタを閉じ、その上にドサツと両腕とアゴを落とした。

「飯でも作るか」

曲げた腕のすき間から、曇った声がもれた。

「ぼくは冷蔵庫を開けた。」

「ないよ……人参しか」

大きなため息とともに立ち上がった父は居間へと向かった。タンスの引き出しを開けると、郵便局の封筒を出した。開けて中身をのぞくと、指を入れて数えた。出した指を今度は曲げたり伸ばしたりして計算をはじめた。ああもうと言いながら指をパツと開き、パチンと封筒を叩いた。

「気分転換だ、たまには外食でもするか」

三駅分電車に乗って降りると、にぎやかな商店街に囲まれた駅前だった。手の平に小鳥をのせた少女が空を見上げる銅像の前で父は立ち止まった。

「えーっと、どっち方面だったかな」

行き先は前に行ったことのある、ご飯おかわり自由の定食屋だとわかっていたので、ぼくはあつちと指さし歩き出した。

線路の高架下に並ぶ店の中を一軒一軒のぞきながら歩いた。ちょうど夕方の帰宅ラッシュで、レストランや中華料理屋やラーメン屋はどれも人でいっぱいだった。この通りは昔から変わらない古い店が多く、どの店も保育園に行く前から見覚えがあったが入ったことは一つもなかった。

赤いレンガ造りの壁の前まで来た。『純喫茶』の看板が掛かっていた。うすい紫色の窓ガラスをのぞくと、ほとんど人はいなかった。奥のほうに女の人がひとり――

「あっ！」

ガラスに額を押しつけた。

「どうした？」

追いついた父がしゃがんでぼくと肩を並べ、のぞきこんだ。

奥にある小さなテーブルの、二つあるイスの一つに母が座っていた。まるでランプ占いしてるみたいに両手で携帯を構えじつとみつめている。来たばかりなのかテーブルにコーヒークップはなく、水の入ったコップが二つ置いてあった。

「人違い、ただのよく似た人だ」

父はそう言うとき窓から離れ、もう歩き出していた。

言われてみれば、いつものジャージ姿じゃない。ひらひらしたシヤツを着、スカートを穿いてる母なんて初めて見た。

やっぱりよく似た人か。念のため、ガラス窓を軽く叩いてみた。ピクッと顔を上げ振り向いた母――にそっくりな人の目がだんだん大きくなり、それからスーッと細くなった。イスの上でゆっくり体を回し壁のほうへ向き直ると、もう背中しか見えなくなっていた。

母の帰らない日は火水木だけでなく、他の曜日にもポツポツ入るようになった。帰ってくるのは週に一、二回、帰ったその朝も寝顔を見るだけだから、母が起きて動いてるのはフスマの向こうからする物音でたしかめるだけだ。

布団の中でぼくはじつと耳をすませる。シャワーの音、冷蔵庫や食器棚の音、それからパソコンがウィーンとうなり、ポトリ、ポトリ、蛇口からシンクに落ちる水もれみたいなキーを叩く音。

そこまでは今までと変わらない。けれどそのあと、何もきこえない時間がずつとつづく。

こうなってるのは仕事忙しいせいなのか、これがいつまでつづくのか、フスマを開けてきいてみたいけど、開けられない。

ひょっとして『事務連絡』の母の父あての手紙に何か書いてあるかもしれない。

ぼくは一度、父があーどうもいかとパソコンを離れ、床にゴロンと寝そべった時、パソコンの前へ行き『事務連絡』ボタンを押さうとした。でもフスマと同じで、開くのがとてもこわい。目をつぶってパチッと押し、薄目を開けてそこに群がってる文字をぼんやりと見る。ずつと前の日付で終わっていた。最近の父と母の言葉は一文字もなかった。

だからなのか。父が小説を書く時、今までみたいに日記を開いてそれをコピーするのを見かけなくなった。それにあの古いノートの日記も、ヒモでくり直して押入れの奥にもどしてしまった。

書きなやんでいるのはどう見てもはっきりわかった。パソコンを

にらみながら急にひとり言を口走ったり、仰向けに床に寝ころび胸にはノートをのせ、じつと天井を見つめてる時間が長くなった。今月はどうとう郵便局へ行かなかった。先生に電話もしなくなった。

ある日の夜七時過ぎ。その日の夕食はレンチンするだけのハンバーグとケチャップライスで、片づけもとくにすんでいた。ぼくらはテーブルを囲んで父はコーヒー、ぼくはミロを飲んでた。その時携帯が鳴った。

時間的に、きっと先生にちがいない。でも父は、まるで聞こえないみたいに、マグカップを両手で包んだまま手を伸ばそうとした。取っついていい？ 父に目できいても顔に返事はない。ぼくは取った。

「もしもし、先――」

その瞬間、ぼくはグツとのどをふさぎ、「先生ですか？」とつづけるのをやめた。この前ちがうおじさんだったのを思い出したからだ。

年取った声が携帯の中できこえた。

「ああよかった、やっぱり先生だ」

父にうなずいてみせながら、ぼくは言った。

けれど父は、顔を上げぼくと目が合うと、サツと首を横に振った。

「あ……」

どう返事していいか困っていると、父はマグカップをのぞきこんだまま、ぼくの手から携帯をもぎ取った。

電話に出ても、時々「はい」とか「ですね」「ですか」と言うだけで、ほとんどしゃべらなかった。聞いているだけの時間がずつとつづき、だんだん父の顔が赤くなってきた。

「ありのままの事実じゃないとダメなんでしょうか？ フィクションを織り交ぜては？ えっ？ はじめに小説ありき、ですか……現実が小説を変えるのでなく、小説が現実を、ですか……はあ……わかりました、何とか戦ってみます」

あいかわらず父は苦しそうに書いては消しをくり返していた。夕飯もレトルトのカレーや親子丼、切って混ぜるだけの麻婆豆腐が多くなった。片づけを終えると拭いた机の上ですぐにパソコンを開いた。

九時になっても、父はキッチンに座ったままだ。ぼくはひとりで布団を敷くようになり、寝る前の世界文学の読み聞かせもなくなった。

そのかわり、朝の七時に目が覚めると、となりでぐっすり眠る父を発見することが多くなった。母の帰ってくる日がほとんどなくな

り、六時過ぎに出ていかなくてよくなったからだ。

ある真夜中のこと、誰かの大きな声でハッと目が覚めた。となりを見ると父は寝ていない。台所の灯りがもれていた。

ぼくはフスマを開けた。

「今の声、お父さん？」

父はパソコンを見つめていた。

「ん？ ああ悪かった、でももう大丈夫、明日から軌道に乗るはずだ」

目をこすりながらぼくは近づいてパソコン画面をのぞいた。父は『事務連絡』を開いていた。ズラッと並んでる文字はもうずっと前に母が書いたレシピ。その下に父は「手紙」を打っていた。

次の日から父は休みなくキーを叩きはじめた。打った文字をたまに消すことはあっても、もう頭を抱えたりうなったりすることはなかった。

けれど今までスラスラ書けていた時の、画面に映った文字と声のない会話をしているような、なんとなく優しくな目つきではなかった。まるで画面に向かって一つ一つの文字を投げつけてるような、きびしい目つきだった。

シャワーの音で目が覚めた。あつ、お母さん、久しぶりだなあ！ぼくははね起きた。

シャワーの音はいつまでも続いて、やっと止まると冷蔵庫、食器棚のつぶやき。遠くから救急車かパトカーがやって来て、また遠くへ行ってしまった。パソコンの起動完了。ゆるんだパッキンからmeler水の音、じゃなくキーを打つ音がきこえたら、今朝はもうフスマを開けてしまおう。きつと母は怒らないだろう。

けれどいつまでもキーの音はしてこない。スランプかな？ もう開けようとフスマの取っ手に指を入れた。

ボタンと大きな音が向こう側でした。ほとんど同時にギーツとイスの足が床をかきむしる音。驚いたぼくの指は勝手にフスマをこじ開けていた。

ものすごい勢いで突進してくる母とぶつかりそうになった。そのぼくに全く気がつかないように、母は一瞬で玄関に下りサンダルに足をつつ込んだ。振り向かずドアを向いたまま、後ろ手にリュックのヒモをつかんだ。ドアを開けリュックを引きずったまま出ていった。

母の座っていただろうイスは机から遠く離れシンクの前に倒れていた。パソコンは半分開いたまま、うつ伏せに床に寝そべっていた。

学校から帰っても、ぼくは朝のことについて、父に何も言わなかった。父はいつもどおりパソコンに向かったまま、「おかえり」と言った。パソコンの画面は斜めにゆがみ、キーボードから少し浮き上がっていたけど、それについて何もきかなかった。

今日はそろそろ飯にしようとか父が言い、いつもより早く食べはじめた。片づけを終えてもまだ七時前だった。

そろそろテレビを観に行こうと、ミロを飲んだコップを洗っていると、ドアをノックする音がした。

誰だろう？　こんな時間に来た人は今まで一人もいない。

「開けてやって」

マグカップを鑑賞するみたいにゆったりしながら父が言った。まるでこの時間に来ることをわかっていて、来たのが誰かも知っているみたいだ。

ぼくはドアを開けた。紺色のスーツを着た、見たことのない若い男の人が立っていた。

「入れよ」

父が言う前に、男の人はもう革グツを脱ぎはじめていた。脱いだグツをきちんとそろえ、床に上がると、

「一体どういうことですか!!」

ふるえる声で言った。泣いてるような怒ってるような、たぶんいつもは怒らない人がめずらしく怒ってる声だ。あれっ、どこかで聞いたことがある……あっそうだ、一度だけ先生とまちがえて電話を取った……思い出した、勝田さんだ。

「まあ座れよ」

そう言っただけ父は立ち、机を回りさっきまでぼくが座っていたイスに座った。勝田さんはパソコンを真正面にして座った。

しばらく二人とも黙っていた。横から見ると、勝田さんは短い髪とツヤツヤした頬で若く見えたけれど、目尻のしわやちよつとだけ交じった白髪で、父と同じくらいの年に見えてきた。やせて背の高い父とは真逆に、背は低めだがスーツがはちきれそうに立派な体つきだ。

「で、何がききたい？」

うつむいて手の中のカップを見下ろしたまま、父が言った。

「交換日記ですよ、今日付けの。彼女が見たと言ったんだ」

父はイスから腰を浮かせ、パソコンを横からのぞき込んだ。

「じゃあ見てみる、自分で」

『事務連絡』ボタンを指さした。

勝田さんはマウスをつかみ、画面の矢印を動かしてボタンを押した。輪っかをグルグル回して一番下まで行った。

勝田さんの頬が、みるみる熟していくトマトみたいに赤く染まっ

た。

「あるじゃないですか！　どうして？！　なぜウソを書く？　しかも彼女の名前で！」

ぼくは小刻みに勝田さんにじり寄って、背中ごしに画面を見た。母の名前があり、空いた何行かがあり、その後ろに、

『出ていきます、今日　それであの子のことですが　あなたが育ててもらえないでしょう　わたしよりずっと、あなたになつてゐるようなので』

「こんなこと書いて何になるんです？　しかも彼女の名を騙って。

引き取りたいなら自分の口で堂々と言えばいいじゃないか！　僕は彼女と二人でこの子を育てたい、子供が好きで虐待なんてありえない、電話でもそうはっきり伝えたじゃないですか！」

父はカップを持って立ち上がった。グイッと飲み干した。

「あんた、コーヒーは？」

勝田さんの顔がポカンと空白に、それから今にも笑い出しそうに唇が引きつった。

「ふざけてんすか！　コーヒーは好きだが、今それどころじゃない」

父はマグカップをシンクに置き、蛇口をひねって水を張った。

「そうか、じゃ俺も二杯目はやめとこう。で、小説は？」

勝田さんの口がまた半開きになった。

「小説は読むかってきてるんだ。いいか、これは冗談できくんじやない、大事な質問だ」

勝田さんはハァとため息をついて首を振った。

「月に二冊は読みますよ、山田悠介のファンです」

父はうなずいた。

「じゃあ読んでみてくれ。あんたの好きなジャンルとはだいぶ違うが」

『執筆中　タイトル未定』ボタンを押した。

勝田さんは読みはじめた。父は勝田さんの背後をゆっくり往復し、たまに画面をいっしょにのぞいた。

時々勝田さんが疲れたように首を回して天井を見上げると、父は話しかけた。

「どうだ、文体の波に乗れてるか？」

「漢字が多すぎて……流れが悪い、もう少し平易な言葉で書いてほしいね」

「ところであいつ今、どうしてる？」

「ああ車で待ってます。さあ、こうしちゃられない」

そろそろ八時になるので、ぼくはあくびをして部屋へ行き、明日の教科書をランドセルに詰め替えた。

「だから、どうだっていうんです？」

勝田さんの声がした。

「ちゃんと読んだのか？　ありのままの事実しか書いてなかったはずだ」

「いやウソでしょ、彼女が日記にあの文言を書いたというのは」

「そこだけ読めばな。だがちゃんと描写してあっただろ、『あいつの名前であいつが書いたかのように、俺が日記に書きました』って」
勝田さんの元々大きな目がさらに大きくなった。生卵みたいにこぼれ落ちそうだ。

「そんなことして……一体何になるんですか？」

「何にも、ただ私小説のためだ」

父は食器棚を開け、コップや皿を何個か取り出した。

「たかが小説のために関係壊していいんですか、人を傷つけて」

それには答えず父は居間に入った。タンスを開け、服を何枚か床の上に出した。ポストンバッグにそれを詰めながら、

「現実によって小説を変えるのはもう限界なんだ。だから俺が先に小説に書き、書くことによって現実を変えることで乗り越えようとしたんだ」

台所にもどってきた父は、さっき出した食器をビニール袋に入れ、それをカバンの中の衣類にのせた。

「ねえ、さっきから何してるんすか？」

父はカバンのチャックを閉めた。

「最後まで読まなかったのか？」

勝田さんはうんざりした顔を左右に振った。

「読んだけど、表現が難解すぎて飛ばし読みだ」

父はパソコンに近づくと、マウスを回した。

「どこが難しい、ここに書いてあるだろ、読んでみる」

父が矢印で指した行に勝田さんは目を細めて寄った。

「『そして私は部屋を後にした』」

ポストンバッグを肩にかついだ父は玄関にしゃがみクツをはいた。

「あんたが今日ここに来ることまでは書いてあっただろ。でもあんたがしゃべったセリフは事実とは異なる。よかったら書き直してUSBメモリを送ってくれ。送り先は決まったらまた連絡する。」

ああそれから、あいつもいっしょに来たことにしてあるだろ、そこも削除しといてくれ」

父は出ていった。

「ぼくのこと何て？」

ぼくは自分の名前を言った。

待って、もう一度読み直してみるといつて勝田さんは右手でマウスを回しながら画面を上へ上へ、左手の人さし指でぼくの名前を追

った。顔を上げ、ぼくと目が合うと首を振った。
ぼくはパソコンに駆け寄り、自分でグルグル回して今度は下のほうへ、ぼくの名をさがした。とちゅうまではあつたけど、ご飯のメニューや郵便局のそばにしかなかった。画面はもう下のほうが空いていて、小説は終わろうとしている。最後にグルッと回すと文字はなくなり、真っ白だった。
部屋にもどってランドセルを肩に背負った。ドアを開け外へ飛び出すと真っ暗な中、父のあとを追った。

（註 作品中に引用しているエドガー・アラン・ポー「黒猫」の冒頭は、佐々木直次郎訳です）